

看護師のエンゼルメイクに関する現状調査

5 階南病棟

○川久保 妙子 鶴木 悦子 合津 朋美 大重 育美 山崎 純子

はじめに

現在病院で亡くなる人の割合は死亡者全体の8割以上で50年前と比べると7倍以上になっている。患者が病院で亡くなることが多い今日、看護師が患者を見取る機会が増え、亡くなっていく患者や残される家族の思いを汲み取ったケアが必要とされている。

当病棟では今まで死亡退院する患者に対し、慣例的に死後の処置が行われている現状があったが、エンゼルメイクの研修に参加したスタッフより伝達講習があり、死後の処置が慣例的に行われていることに対して疑問を持った。顔はその人らしさが最も表れるところであり、その人と最初に対面する顔はインパクトの強い思い出になる¹⁾と述べられおり、エンゼルケアの中でもエンゼルメイクは重要なケアであるといえる。

そこで今回、病棟で勤務する看護師のエンゼルメイクに関する現状を調査した。その結果、エンゼルメイクに関する現状やその問題点、今後の課題が明らかになったのでここに紹介する。

I 研究目的

看護師のエンゼルメイクに関する現状を把握し、問題点や今後の課題を明らかにする。

II 研究方法

- 1 対象 本院で病棟で勤務する看護師 189名
- 2 調査時期 2008年3月18日～3月25日
- 3 調査方法 質問紙による自記式・留置式調査法
- 4 倫理的配慮 質問紙上で研究の主旨・研究参への意思決定の自由・研究参加有無で不利益を被らないこと・プライバシーの保護について説明した。質問紙の回収をもって研究の参加に同意を得た。

5 調査内容

看護師の基本的属性・エンゼルメイクの教育について・エンゼルメイクに使用する物品について・エンゼルメイクの手技について・遺族との関わりについて

6 分析方法 単純集計

III 結果および考察

1 教育・手技について

臨床の場でエンゼルメイクを教わった人が88%を占めた。しかし、どのような内容を教わったかという質問には、「特に教わっていない」「みようみまね」と答えた人が多く、先輩スタッフが行う内容を見て覚えたことが推察された。

エンゼルメイクは看護基準や手順のようなマニュアルがなく、きちんと教わる事がなかった。また、死後のケアは少人数で個室で行われ

るため、エンゼルメイクの方法を共有することもできなかった。その結果、統一した方法がなく、エンゼルメイクの手技に自信がなく、自分の手技が不満足であると答えた人が73%と多くなっていることが分かった。

エンゼルメイクの手技や知識に不安を持ち、その必要性を感じている人が76%と多数おり、講習会の開催や院内統一したマニュアルなどエンゼルメイクの知識や技術が得られるよう教育の場が必要である。

2 物品について

エンゼルメイクに使用する道具の品揃えに満足かという問いに不満足と答えた人が56%であった。その理由として、道具の種類少なさを挙げた人が多かった。新しいセットをつくることとして、それに望むことがあるかという質問に対し、あると答えた人は51%で、その中の理由に物品を多くして欲しいという意見が多かった。このことから、現状ではエンゼルメイクに使用する物品が揃っていないことがわかる。個々の患者の状態に対応し、最期のケアとしてエンゼルメイクをするためにも、使用する物品について検討していく必要がある。

3 遺族について

エンゼルメイクを行う際、遺族と一緒に行うかという質問に対して家族の希望で行うと答えた人が多数おり、その際の遺族からの反応は喜ばれていることが多かった。

ワーデンは死別に適応するためには4つの課題—悲観作業を完了する必要があり、その最初の課題に喪失の事実を受容すること、第2に悲観の苦痛を乗り越える、第3に死者(故人)のいない環境に適応する、第4に死者を情緒的に再配置して生活を続けることであると述べていて、病棟でエンゼルメイクを行う際に遺族へ行える援助は特に第1と第2の段階に合致する。

遺族と一緒にエンゼルメイクを行うことによって遺族が死別の痛みを受け止め、乗り越える一助となる。逆に看護師だけでエンゼルメイクを行なうことは、遺族がグリーフケアを受ける機会を損なう可能性を含んでいる。そのため、遺族が十分に悲しみが表現できるように配慮する必要があり、また遺族のニーズに応じて対応していくことが大切である。

IV まとめ

エンゼルケアに関する教育の充実及び使用物品の検討を行い、よりよいグリーフケアにつなげられるようにすることが今後の課題である。